

## 田山花袋「山の悲劇」論

——「一兵卒」、「自然」、小島烏水から読み解く——

熊谷昭宏

はじめに

田山花袋「山の悲劇」は、一九一七年一月発行の『文芸倶楽部』第二三巻第一号に発表された短篇小説である。登山を趣味とする三十三歳で独身の某役所の職員、「O」が休暇を利用して、新たなルートで南アルプスを踏破し、「信州から甲州、遠州の方へ出て行つて見よう」<sup>①</sup>、という計画を立て、案内者を雇わずたった一人で山に入る。当初は自信に満ちていた「O」であったが、途中でルートを誤って遭難し、長い彷徨の末、疲労や雨による体力の低下によって衰弱し、死に至るといふ物語である。本作発表の前年、海軍省職員の落合道徳が南アルプス山中で遭難して行方不明になる事故が起きているが、この事故がモデルとなっている。ちなみに本作と同年に花袋が発表した小説「山のロビンソンクルウソー」(『東方時論』、

一九一七年二月)<sup>③</sup>でも二人の登山家が南アルプスで道に迷い、危険な川の渡渉などを続けるが、この作品では一方の登山家が「この奥は、去年落合属の行方不明になつた南アルプスの連嶺だからな」と口にする場面がある。<sup>④</sup>

ただ、本作は発表当時から文壇ではほとんど注目されてこなかった。花袋は本作発表と同月に「KとT」(『文章世界』第一二巻第一号)、そして『一兵卒の銃殺』(春陽堂)も発表しており、文章時評等での話題はそれらに集中した。<sup>⑤</sup>

「山の悲劇」に対する実質的な批評として最初のものは、花袋死後に刊行された『花袋全集』の第七巻(一九三六年八月、花袋全集刊行会)に収録された、中村星湖による「解説」であろう。この「解説」で星湖は、本作とイプセンの「ブランド」(ブラン)(一八六六年)、アンドレーエフ「血笑記(赤い笑い)」(一九〇五年)と

の類似を指摘している。とはいえ、これはあくまで全集一冊の「解説」の中の一部分である。その後も現在に至るまで、研究対象となることはほとんどないといってよい。

そのような乏しい先行研究の歴史の中で、正面から本作を分析しているのが、小林一郎と中村誠である。小林は、本作が花袋の言う「自他融合」の実践である可能性を指摘し、「長い艱難と努力とを続け、「自己」を信じ「社会」を拒否して、「孤独」の中を歩き続ける」主人公「O」の姿が「人生の悲劇」であると述べている<sup>⑥</sup>。中村は、日本近代文学史における本作の位置づけを試みている。同氏は本作が日本における本格的な「登山小説」の嚆矢であるとしたうえで、深山に分け入ることで都会の現実生活から逃れようとする「O」の孤独かつ浪漫的な冒険の物語が、心理小説としても優れていることを指摘している<sup>⑦</sup>。

本稿では、ここに紹介した星湖の「解説」、小林と中村の貴重な先行研究を踏まえたうえで、花袋の小説のパターンの変化と類似性に注目しつつ、山奥で一人死んでゆく登山家を描くことと、この時期の彼の重要な関心事との関係を考察する。また、詳しくは後述するが、本作に山岳紀行作家の小島烏水という固有名とそのイメージを読み取り、さらには烏水の理論と本作を併置することで見えてくる作品の意義も明らかにしたい。

一

「山の悲劇」の主人公「O」は、「役所の大勢の同僚の中に小さくなつてゐる」ことや「叔母の二階の二室につまらなく欠伸をしてゐる」こと（二七二頁）よりも、都会を遠く離れた山奥の「自然」に接することに喜びを見出す人物である。物語の中盤、山中の「Yの小屋」で二人の「山人」と出会ってその後の進路について質問をしたのを最後に、彼は何日間も（しばらくして彼は遭難を自覚してから経過した日数が分からなくなる）ただ一人の人間とも出会うことなく死んでゆく。ところで、たった一人で歩行を続ける主人公が死に至るさまが三人称によって、かつ主たる視点人物として語られる花袋の小説といえ、一九〇八年に発表された「一兵卒」（『早稲田文学』第二六号、一九〇八年一月）がすぐに想起される。

主人公の「一兵卒」加藤は日露戦争従軍中、脚気衝心を患いつつも入院先の病院を抜け出し、満州の野を歩き続けた末に辿り着いた洋館で病状が急激に悪化し、死に瀕する。横になったまま起き上がれなくなった加藤は、「苦しい、誰か……誰か居らんか。」<sup>⑧</sup>という叫びを繰り返すのだが、この叫びと叫ぶ加藤の意識は、語り手によって「意識的に救助を求めると言ふよりは、今は殆んど夢中である。自然力に襲はれた木の葉のそよぎ、浪の叫び、人間の悲鳴！」

(六二七頁)と語られる。二人の兵士が加藤の存在に気づいて声をかけ、携帯していた軍隊手帖から加藤平作という彼の名が初めて明らかになるのだが、この時には既に意識レベルは低下し、混濁した状態に陥っている。

この時の加藤の脳裏には、複数の故郷の記憶が像となって連想的に浮かんで消えてゆく。記憶の継起については、まだ街道を歩いていた時にも起きている。例えば、「故郷の野で聞く」とは違う虫の声をきっかけに、「母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬灯のごとく旋回」し、次いで「櫻の樹で囲まれた村の旧家、団欒せる平和な家庭、続いて其身が東京に修業に行つた折の若々しさと、「恋した女」や友人との記憶が甦っている(六一二頁)。末尾の記憶の浮沈は、この時の加藤の内面の変容に対応しており、再び現われた「走馬灯」と彼が自覚する最後の感覚を、語り手は次のように表現する。

兵士がかれの隠袋カサヅクを探つた。軍隊手帖を引出すのが解る。かれの眼には其の兵士の黒く逞しい顔と軍隊手帖を読む為ために卓上の蠟燭に近く歩み寄つたさまが映つた。三河国渥美郡福江村加藤平作……と読む声が続いて聞えた。故郷のさまが今一度其の眼の前に浮ぶ。母の顔、妻の顔、櫻で囲んだ大きな家屋、裏から続いた滑らかな磯、碧い海、馴染の漁夫の顔……。(六三〇

頁)

この後、「堪へ難い此の苦痛から脱れ度いと思つた」(六三〇頁)というもはや意識なのか無意識なのか判然としない、願ひとも感覚ともつかないものが語られる。続けて「蠟燭がちら／＼する。蟋蟀が同じくさびしく鳴いて居る」(六三〇頁)という音を含む情景が語られるが、この段になると、語り手が瀕死(既に死亡しているか)の加藤に焦点化しているのか、看取る兵士(たち)に焦点化しているのか、あるいはその外部からの情景を語っているのか分からなくなり、明け方に軍医が到着したことが語られた直後、「其の一时间前に、渠は既に死んで居た」(六三一頁)ことが明かされる<sup>⑨</sup>。

では、道を失い山中をさまよひ続ける過程で、当初都会とそこで人間関係を嫌悪していた「O」の内面には、どのような変化が起きたのだろうか。斜面上り下りに加え風雨にさらされ徐々に体力を奪われ、次のように「O」の「心は、不思議にも種々さまざまに妄想に満たされ」る。

種種の光景が現はれたり消えたりした。そしてそれが大抵遠い過去のことであつた。稚い頃、城址で友達と一緒に遊んでゐるさまが見えるかと思ふと、何処か池のある二階屋の欄干で、自分はある女と話をしてゐる。その女の誰であるかは、はつきりわかつてゐるのであるけれども、につこり笑つたその顔もそれ

とはつきり見えるのであるけれども、何うしてもその池が、二階屋がわからない。(略)と、不意に叔母の顔が見え出した。

(二九五頁)

まさに「一兵卒」の加藤が見た「走馬灯」のような記憶の断片の継起であり、女や家族(叔母)との記憶が「顔」に象徴されていることもよく似ている。また、死の直前の「O」の身体の衰弱と意識混濁の過程の語りも、加藤の最期と非常によく似ている。この後苦しい彷徨の末に衰弱しきって仰向けになり、「天気になつたと見える」かう思つただけでかれは昏々とした。「(三〇二頁)」というように、「O」は覚醒と昏睡を繰り返し、次のような最期を迎える。

またある時間が過ぎた。かれはふと叔母の顔を眼の前に浮べた。つゞいて呪つた女の顔が掠めるやうにかれの意識を横ぎつて行つた。あゝとかれは微かなうめきのやうな声を立て、体を動かした。で、今まで正面に仰向けに寝てゐた顔が少し横になつて、今度は日影が髪の後頭部を照すやうになつた。かれは静かに右の手を胸の上に持つて行つた。それきりであつた。明いたま、動かなくなつたかれの両眼は、永久に広大無辺の蒼空に面してそのまゝに残つた。(三〇三頁)

もはや語り手は「O」の感覚を語らなくなっているが、死の間際に加藤のように、その内面にはやはり家族である叔母と、無意識下

に常にあつたであろう別れた女の「顔」が相次いで浮上しては消えてゆく。この記憶の浮沈を最後に語り手は、「一兵卒」における語り手が加藤への焦点化を行わなくなつたのと同様に、「O」への焦点化を完全にやめる。そして、彼の外部の視点から死んでゆくまでの身体の動きが語られ、物語は閉じられる。

花袋は両作品の關係に言及していないが、「山の悲劇」執筆にあつて、三人称の語りによる主たる視点人物の主人公の死に方が、話題となつた過去の自作と非常に類似することを自覚していた可能性は高い<sup>10)</sup>。死にゆく主人公への語りの焦点化という点に注目すると、「山の悲劇」はまさに、山という場、遭難という状況下で語られた「一兵卒」のような作品であると、ひとまずは言えよう。

## 二

ただ、死への彷徨を続ける主人公二人には、気になる相違点も見られる。遭難した「O」の内面には、記憶の断片が浮沈する「妄想」のほかに、次第にある変化が見られるようになる。

それに、久しく無人の境にあたといふことが、誰にも一人逢はないといふことが、大きな空虚な不思議な自然に圧迫されたといふことが、かれの神経を不健全にした。今でも、をりをり名状し難い恐怖が何処からか来るともなくかれを襲つた。(二

九八頁)

次に示す場面も、そのような変化の例である。

無限の神秘がかれの周囲にあつた。そしてまたその無限の闇の中から、ぢつとかれを見詰めてゐるものがあるやうな気がした。それは今まで自分の世にあつて見たことのないもので、またさういふものがあらうとは夢にも思はなかつたものであつた。死——と言ふ字が突然かれの頭を掠めて行つた。(二九九頁)

「一兵卒」の加藤も当然ある時点から「死」を強く意識するのであるが、「隠れ家がなければ、此処で死ぬのだと思つて、がつくり倒れた」(六二三頁)り、「死ぬのは悲しいといふ念よりもこの苦痛に打克たうといふ念の方が強烈であつた」(六二六頁)というように、それは外部から自己を見つめる「無限の神秘」としてではなく、運命もしくはいずれ訪れる事態として認識される。そして加藤の場合には、「死」の「神秘」よりも、今身体内部にある「苦痛」の方が重要な問題となっている。

なぜ九年の時を経て、「一兵卒」の加藤のような意識の流れを見せつつ死ぬ青年が再び描かれることになつたのだろうか。そして、「O」はなぜ加藤とは異なり、「不思議な自然」やその「無限の神秘」というものを感じて死ぬことになつたのか。また、その死に場所が山であることの意味は何なのか。

小林一郎は先に引用した「O」の最期の場面について、「これが、あるいは「自他融合」の形かもしれない<sup>①</sup>」と述べている。この「自他融合」とは、花袋が「山の悲劇」発表の前後に『時事新報』と『太陽』に発表した「自他の融合」(『時事新報』、一九一六年三月七日〜二一日)、「最近に読んだ小説」、『太陽』第三卷第五号、一九一七年四月 一九一八年一月、耕文堂刊行の『毒と葉』収録に際して「自他の融合」と改題)などの評論で盛んに用いた用語である。「時事新報」発表の「自他の融合」において花袋は、人は「自他融合」を愉快だと感じ、その具体例として恋や友情を挙げ、さらに自身の経験として、「ある温泉場」での次のようなエピソードを紹介する。

その時、其処に一人の老いた百姓が子供を伴れて入つて来た。そして私の傍に来て、丁寧な挨拶をして、皺だらけの手を私の当つてゐる火鉢に翳した。私は其時、不思議な自他融合を感じた。(略)私はその百姓の中に私を発見した。其皺の深い大きな手が私の手を発見した。その訥々とした言葉の中に、私の言葉を見つけた。<sup>②</sup>

一方、『太陽』発表の論稿では、「自他融合」の定義めいたもの、あるいはそれを自覚する方法が次のように述べられる。

一度自分で体感したものを、もう一度他にひつくりかへして見

るといふこと、自己の経験を他の中に発見するといふこと、

(略) 自然と自己とをいかに一致させるかといふこと<sup>13)</sup>

これが芸術上の大問題であるというのだが、どちらも漠然としていて、かつ論理の飛躍が大きいという意味で難解である。ただ、小林の言うように、「山の悲劇」に見出される問題の一つは、確かに「自他融合」であると考えられる。本章では、作品末尾に注目した小林一郎とは異なる観点から、再び「山の悲劇」と「自他融合」を結びつけてみたい。

花袋は「山の悲劇」の発表と同時期に『青年文壇』で連載を開始した「小説新論」(『青年文壇』第二巻第一号〜第七号、一九一七年一月〜七月)の八「想像と事実」において、次のように述べている。

しかし、この事実といふことに対して疑ひを挟まはんだ議論も、沢山出た。しかし、その多い議論の中で一番価値のあるのは、事実の奥に横つてゐる、科学でも何うすることも出来ない神秘な境にまで入つて行つて、事実にさう絶対の權威を持たせるのは危険だと言つた議論であつた。成ほど、事実と言つても、現はれた事実そのものだけが総てではない、人間にはわからないことが沢山にある。深く入れれば入るほど「自然」はわからない。或は人間は死にまで到達して、それで始めて「自然」がわかるやうなものかも知れない。だから、真に迫ると言つても、無論、

それは程度の問題である。<sup>14)</sup>

これは「真」に迫る小説を書くために「想像」を排して「事実」を描くべきであるという、花袋が明治三〇年代後半からこだわり続けてきたテーマに関する一節である。花袋はどうやら「真」なるものと「自然」を、ほぼ同義で用いているようである。

ところでこの主張を「山の悲劇」と併置したらどうなるだろうか。地図も磁石も役に立たない、「科学でも何うすることも出来ない神秘な境」が見出され、「人間にはわからないことが沢山に」起こる。山に「深く入れれば入るほど」「わからない」ことは増える。このように見てくると気づくのは、この「想像と事実」が、まるで「山の悲劇」の自作解説のようになっていくということである。

永井聖剛は「自他融合」の花袋の小説論における類語としての「主格合一」の意味を考える中で、やはり花袋が頻繁に用いてきた「自然」という語との関わりについて、「実体としての「自然」<sup>ネイチャー</sup>ではなく、まずもって、自他の境界をいったん無化し、再編成する——類化を促す機縁あるいは環境であり、またその手段でもある」と述べているが、「小説新論」で花袋が用いた「自然」は、まさに「自他の境界をいったん無化し、再編成する」死ぬまで「わからない」何かであると言える。そしてその意味で、花袋が「自他の融合」と表現した、この時期の彼の創作の重要なテーマの一つに関わ

る用語としても捉えるべきであろう。

確かに「一兵卒」の手法を再利用するのであれば、実体的な他者から隔てられた孤独と、極度の疲労と衰弱による意識レベルの低下という身体的な状態は重要で魅力的である。しかしそれなら、再び戦場でさまよう、もしくは戦場で倒れる兵士を描いてもよかつたはずだし、深い森林からの脱出を目指して奮闘する中で傷つき、飢え、衰弱する身体感覚が多く語られる物語になる可能性もあつたはずである。読者が既視感を覚えることを避けたということも考えられるが、花袋は小説において類似する設定を繰り返し用いてきた経緯があるため、それは決定的な理由とはならないだろう。

「一兵卒」の加藤は堪えがたい痛みを抱えながら意識を失つていったが、「〇」は時折寒気や喉の渴き、疲労を覚えはするが、それに苛まれ続けるということはなく、「意識がぼつとして、疲れたのか飢えたのかそれすらわからぬ」（三〇一頁）くなって以降は、大した身体的な苦しみや不快感を感じなくなってしまう。「〇」を苦しめ、追いつめたのは、身体的な苦痛ではなかつたのである。それは何か。もちろん孤独は彼の精神状態に影響し、道に迷つたことを自覚して二、三日経つと、「あらゆる人間に対しての言ふべからざる憧憬と愛着とを感じた」という心境の変化を見せる。ただ、彼を精神的に追い詰めたのは、そのような人恋しさだけではない。本

章冒頭の引用で示したように、山中をさまよい歩く「〇」は時折、「神経を不健全にし」、「名状し難い恐怖」に襲われることになる。また、さらに時間が経つと、この「名状し難い恐怖」は錯覚や妄想という形で彼を襲う。

思ふさま渴を医したかれは、ふと自分の姿がその水の澄んだ鏡にはつきりと映つてゐるのを見た。蓬蓬と延びた髪、顎から鼻へかけて一面に深く生えた鬚、蒼白い物凄い顔、ぎよろ／＼光つた眼、それを見た時には、かれは後に倒れやうとした。かれは恐ろしい生物を其処に発見したやうな気がして戦慄した。

続いて、何だ、馬鹿々々しい。自分の顔ぢやないか。かう思つて、もう一度其処に映つた蒼白い顔を見た。しかし何うしてもそれが自分の顔とは思はれなかつた。別にさういふ生物が其処に、淀んだ水の中にあて、それがちつと自分を見詰めてゐるやうに思はれた。<sup>16</sup>（三〇〇頁）

一見「自我融合」とは無関係の出来事のようにだが、「〇」は水面に映つた自分の顔を自己とはかけ離れた「恐ろしい生物」であるかのように錯覚して「戦慄」し、それに「見詰め」られているという妄想を抱く。まさに「自我」の境界の安定が脅かされる事象であるが、この原因が単に「久しく無人の境にゐた」ことだけでなく、「大きな空虚な不思議な自然に圧迫された」ことでもあると、語り

手は説明する。

これが先に見た花袋の言う「自然」との出会い、あるいは「自然」そのものであるならば、それは決して幸福で心地よいものではなく、恐るべき対象、恐るべき経験である。しかし同時に、非常に単純明快に、山という「自然」の中で（との関わりにおいて、を理解のためのモデルとして）描かれているとも言える。そして、「自然」が「わかるやう」になったかどうかはさておき、「O」は最終的に「死にまで到達」する。「山の悲劇」では、実験的に、具体的にで実体的な「自然」との格闘の中で「自己」の関係を語ることが試みられたのではないだろうか。

### 三

それでは、「自己融合」の物語はなぜ山という場、登山という行為の中で描かれたのだろうか。前章では「自己融合」理解のモデルとして南アルプスの山奥の「自然」が選ばれた可能性を指摘したが、ここでは同じように山と登山と「自己融合」を結びつける、もう一つの要素について、考えてみたい。

主人公の「O」は近代登山を趣味とする青年であり、登山口周辺の村の人々の助言を軽視し、「五万分の地図」や磁石、測高器といった近代的な登山用具を信頼する。<sup>17)</sup>

これらの用具を所持し、その性能とそれを使いこなす自身の経験や判断力を信じていること以外にも、彼の登山への向き合い方の近代性が分かる点がある。それが、登山情報の収集の様子である。

北アルプスは既に跋涉した。恐らくK氏といへども、其方面の知識についてはかれに及ばぬであらう。(略) これからは南アルプスである。(略) 一三年前にはK氏とT氏が大規模の探検隊を組織して、甲州から四泊乃至五泊の予定で、米やら味噌やらを沢山に用意して出懸けて行つた。その探検の報告は、彼は殊に注意して読んだ。先づ一鞭を著けられたやうな気がした。(略)『さうだ。これをつやつて見よう。先生方のやつたのは、此方から向うに横断して行つたゞけである。それでは面白くない。自分はその山脈の背を伝つて、信州から甲州、遠州の方へ出て行つて見よう。なアに、案内者なんかいらん。食料だつて、さう大袈裟に用意して行かなくつても好い。地図——五万分の地図、それに、鯉節、その他少量の食物があれば足りる。紳士的に、金を使つて、大勢人足をつれて行けば誰にだつて出来る。』(二六五頁)

長い引用になつたが、叔母宅の二階の六畳で「O」が登山計画を練るこの場面からは、彼の登山への欲望が、明らかに「K氏」「T氏」ら登山界の有名人と思しき「先生方」の業績への嫉妬として生



まれ、増大していることがよく分かるだろう。

小林一郎と中村誠は、作中の地名のイニシャルにそれぞれ現実の固有名詞がある程度対応することを指摘している。<sup>18</sup>では、この箇所に見られる、人名を表わすものについてはどうだろうか。「O」の欲望を生んだ（増大させた）登山情報に関して言えば、気になる現実の登山記録が存在する。「O」は、北アルプスを登り尽くしたという自負があり、「恐らくK氏といへども、其方面の知識についてはかれに及ばぬだろう」と、登山界の権威的人物と思われる者への対抗心を抱いている。その「K氏」は「二三年前」、「O」が今後の目標と考える南アルプス方面に、「T氏」と共に「大規模の探検隊を組織して、甲州から」登ったとされる。「O」は「先づ一鞭を著けられたやうな気がし」、その「探検」への嫉妬が、遭難につながる同山域への単独登山へと彼を駆り立てたことになる。注目すべきは、「O」がその探検の情報を、「殊に注意して読んだ」とあるように、書かれた文章によって知ったという点である。

この当時、「紳士的に、金を使つて、大勢人足をつれ」た「探検隊」を組織して登山を行った人々と言えば、銀行員で紀行文家の小島烏水らが設立した日本山岳会（一九〇九年に山岳会から改称）会員が想起され、その記録が載るとすれば、会の機関誌である『山岳』の名が挙げられるだろう。実際、本作発表時から見てもモデル

となった落合の遭難時から見ても「二三年前」ではないが、一九〇九年夏、小島烏水、高頭式、高野鷹蔵、中村清太郎、三枝威之介という日本山岳会の中心的なメンバーが延べ一日間の日程で南アルプスに登っている。荷を担ぐ人夫を含む総勢一八名のまさに「大規模の探検隊」だったようである。その様子と当時まだ不明確だった一帯の地理についての考察などは、翌年三月発行の『山岳』誌上に連名で発表されている。<sup>19</sup>「K氏」が小島氏を、「T氏」が高頭氏もしくは高野氏を指すかどうかを確定することはできないが、少なくとも同時代の近代的な登山家（それは「紳士」か「紳士」予備軍である可能性が高いが）であれば、そのような謎解きをしたくなるようなイニシャルである。

ここで強調したいのは、「O」の登山の動機が、長く尾を引くらしい失恋の傷を含めた都会生活の生きづらさからの逃避の願望だけでなく、烏水らを強く想起させる「先生方」への嫉妬や対抗心にも求められるということである。

#### 四

ところで、登山における「自然」と自己との神秘的な「融合」の経験は、山岳紀行文の第一人者（あるいは競争相手のいない唯一者）である小島烏水が明治四〇年代に追求した問題でもある。

花袋は一九〇四年、烏水からの初めての書簡に対して返信し、そこから両者の交流が始まった。烏水はその後、ノルウェーの作家、ビョルンソンについて花袋に書簡で質問しているが、その中で花袋は、日本の「山岳小説」における「山岳趣味」の「鼓吹」への意欲を見せている。<sup>20)</sup>

会員としての活動の実態はなかったと思われるが、実は花袋も、一九〇六年四月発行の『山岳』第一年第一号末尾に掲載された「会員氏名」に名を連ねている。烏水も同誌第一年第三号（一九〇六年一月）「雑録」欄の「本会と文学家諸氏」という記事（署名は「一記者」）において、「純正科学をのみ旨とするが如き、一方に偏したるものにあらざる」ことを目指す山岳会に「詩人文士の自ら進んで、加入するといふこと」を自慢げに述べたうえで、「詩人文士」会員の一人として、「盛んに世に行はる、田山録弥（花袋）氏」を紹介することを忘れなかった。

ところがその烏水は、花袋が主筆であった『文章世界』誌上で酷評されるという経験をしている。一九〇七年一月発行の『文章世界』第二卷第一三号に掲載された合評「今の紀行文家（合評）」では、烏水の山岳紀行文集『雲表』（一九〇七年七月、佐久良書房）に対して、「此通りでは全くだめだ」という痛烈な言葉が浴びせられている。この合評では、烏水以外の紀行文作家に対しても軒並み

厳しい評価が下され、唯一、合評参加者の身内とも言える花袋の紀行文のみが高評価を得ている。これに対して烏水は黙っていられたかったようで、「紀行文小論」（『文章世界』第二卷第一四号、一九〇七年二月）一九〇八年九月、如山堂刊行の『山水美論』収録に際して「紀行文統論」と改題）で次のように反論した。

或は人跡未踏の深山幽谷に入つては、人類と交渉が絶無になるから、従つてヒューマン・インテレストも薄くなるといふかも知れない、（略）併し所謂ヒューマン・インテレストの意味が違ふ、（略）我を高い階段に立たせて、自然の光と色とを吸ひ寄せる凸点にすることが出来れば、我には自然が宿り自然には我が通つてゐる、つまり自然は「他の自我」になるからヒューマン・インテレストは、此意味に於て天上天下到るところに存在する、個性の賦彩は、雲にも映らうし、霧にも出やうではないか。<sup>21)</sup>

ここで烏水が用いた「ヒューマン・インテレスト」とは、合評で花袋の紀行文に対してなされた、「どの文にもヒューマン、インテレストが比較的豊かに出てゐる」という片上天弦による肯定的な評価を強く意識した言葉である。天弦のこの言葉を受けた前田木城は「人生といふもの、一面を深く思はせる様な処がある」とコメントするのだが、合評参加者には、「ヒューマン・インテレスト」のあ

る紀行文は「人生」を「深く思はせる」ものであるという共通理解があつたようである。

鳥水の反論に対し木城は、『文章世界』同号に「紀行文小論」についてを発表し、「ヒューマン・インテレスト」について、「氏の解する意味でいへば、凡そ天下の作品の中にこれを欠いてゐるものは一つもない」ことになると、鳥水の主張を退けた。その上で「ヒューマンの意味は『人性の』といふことであつて『作者主観の』といふことではない」と述べ、鳥水が「ヒューマン」の語義を誤解し、「人性」もしくは「人生」を「作者主観」と取り違えた点を批判する。だが一方で、「我には自然が宿り自然には我が通つてゐる」という点については取り立てて矛盾や誤解を指摘していない。つまり、この「自然」観自体は了解されていると言えるのだ。

また、合評の参加者の一人である吉江孤雁はこの数年後に、次のような「自然」論を主張している。

自分の主観が何所へでも拡がつて行つて、そして、如何なる物に對しても、其の物から自己の影を求めて来たいと云ふ要求からして、(略)自然の中に自己の生を発見しやうとする、其の要求が<sup>つま</sup>自然の中に、(略)自然と人間との共通性を求めやうとすることになる。さうすれば野の中にある一群れの森も、それに風が當つて居るのも、自己のライフが其所で活動して居

ることになる。<sup>22)</sup>

つまり、「自分の主観が何所へでも拡がつて行き」、「自然と人間との共通性を求め」、外部のあらゆる「自然」現象の中に「自己のライフ」の「活動」を見出すことができるという理屈である。これは坂井健や小堀洋平の研究を紹介・援用した永井聖剛が指摘する、森鷗外經由のハルトマン美学等の「花袋なりの展開」、同時代の「すぐれて間テクスト的な主題」<sup>23)</sup>でもあつただらう。

ちなみに鳥水は、「日本アルプスの南半」(「山岳」第二年第一号、一九〇七年三月)の二「日本アルプス連嶺を觀する記」で、自身の「自然」論が形成された背景について次のように語る。

意味のある自然とは何ぞ、エマルソンの自然論に感化された自分であるから、今でもかぶれてゐるのかも知れないが、自然と心靈と對立した宇宙を言ふのである。<sup>24)</sup>

これは、いかにもこの世代の文学者らしく、エマーソンの「自然」論に影響され、明治四〇年代の現在もなおその影響下にあるという告白である。恐らく鳥水は、エマーソンの次のような主張を自身の「自然」論に取り入れていたのだらう。

我等と隔離して存在する一切のもの、哲学上差別して非我 Non-Me と呼ぶ一切のもの、即ち、天然物と人工物と、一切の他人と自己の身体とは、みな此の自然の語の下に置かざるを得ず。<sup>25)</sup>

花袋がエマーソンを受容していたことは既に明らかであり、小説か紀行文か、「自然主義」か非「自然主義」という線引きには意味がなく、同時代文学者の公約的な思想を花袋と烏水（そしておそらく孤雁も）が共有していたということである。ただ、本稿で指摘しておきたいのは、「山の悲劇」における山と登山という要素に注目した時、明治三十七年に始まり山岳会の設立、『文章世界』での論争等を経た花袋と烏水の主張同士の関係が重要になる、ということである。

花袋は「現代の紀行文」（『文章世界』第六卷第一四号、一九一一年一〇月、初出時は無署名）において、「紀行文といふ名称があるが、別にさうした種類に分けるべきものではなく」「作者の一人称で旅行を書いたものである」という紀行文の再定義を行っている。ここで花袋は、自身も盛んに発表した（そして続けた）紀行文というジャンルの自立性を否定し、「作者の一人称で旅行を書いたもの」としてそれが小説に内包される可能性を示した。これは結果的に、紀行文に小説と同等の価値を保証しようとした烏水の必死の主張を退ける結果となっただろう。しかし同時に、エマーソン等の思想を背景とした「自然」との「融合」のイメージは、同時代文学者の関心として烏水と共有されていた。そして、烏水が紀行文で描こうとしていた近代登山家と「自然」との関わりを、紀行文の上位

ジャンルであるとした小説において描いたと言えるだろう。それは結果的に、烏水が試行錯誤した問題を引き継ぐことにもなった。そして「山の悲劇」は、花袋が明治四〇年代以降表現しようとして続けていた「自然」を、誰もが「自然」の現われとしてイメージしやすい山という「自然」の中で、山という「自然」と人間との関わりとして描いて見せた小説であったと言える。

おわりに

花袋が相次いで「自他融合」の何たるかを説いていた一九一六年から一七年というタイミングで発表された「山の悲劇」は、記憶と妄想の浮沈や流れを語った過去の話題作「二兵卒」を彷彿させる主人公を登場させ、イメージしやすい「自然」の力との関わりの中で起こる「自他」境界の曖昧化の典型例を示す試みであっただろう。そしてその背後に、紀行文と小説との差異を示そうとした明治四〇年代の小島烏水の紀行文論と同じ論理が、小説で「自然」の力を表現するための論理として甦っていることもまた、興味深いことである。若い頃から日光の連山を愛し、紀行文「日光山の奥」（『太陽』第二卷第一号〜第三号（一八九六年一月〜二月））によって紀行文家として有名になり、その後『重右衛門の最後』（一九〇二年五月、新声社）などの山間の人生を描く小説を発表した花袋ではあるが、

「山の悲劇」発表後、「山のロビンソン・クルウソオ」を除くと、近代的な登山家を主人公とする小説を書くことはなかった。どうやら近代登山は、花袋にとつては、「戦争」のように継続的に利用すべき材料ではなかったようである。しかし、「自然」と「自我」の関係をおさらいするような小説においては、山という場、近代登山という行為はまたとない好材料だったのである。

注

- ① 『定本花袋全集』第七卷（一九九三年一〇月、臨川書店）二六五頁。本稿における「山の悲劇」本文の引用は、全てこれに拠り、引用後に示した頁番号は同書のものである。
- ② 例えば『東京朝日新聞』では、八月九日に「又も登山者の行方不明」、翌一〇日に「葉草取が猟師小屋で会った」という記事で報じている。
- ③ 初出未見。なお、臨川書店版『定本花袋全集』別巻（一九九五年九月）の著作年譜でも、宮内俊介『田山花袋全小説解題』（二〇〇三年二月）でも未見となっている。
- ④ 引用は田山花袋『旅から』（一九二〇年六月、博文館）一二七頁に拠る。
- ⑤ 管見の限りでは「山の悲劇」にともに注目した文芸時評は見当たらず、多くが「KとT」などを紹介したり論じたりしている。例えば一九一七年二月発行の『新潮』第二六卷第二号の「新年の創作壇」において柴田勝衛は花袋の一月発表の小説として「KとT」（前掲）、「礼拝」（『中央公論』第三二年第一号、一九一七年一月）のみを挙げている。同月発行の『早稲田文学』第一三五号の「新年の小説」でも、執筆者の加

- 能作次郎は「KとT」、「礼拝」、「長流」（『早稲田文学』第一三四号、一九一七年一月）を取り上げ、「山の悲劇」には触れていない。
- ⑥ 小林一郎『田山花袋研究——「危機意識」克服の時代（二）——』（一九八二年六月、桜楓社）一五〇頁—一五五頁
- ⑦ 中村誠『田山花袋の山岳小説——「山の悲劇」小考——』（『解釈』第六八卷第一・二号、二〇〇二年二月）
- ⑧ 『定本花袋全集』第一卷（一九九三年四月、臨川書店）六二七頁。本稿における「一兵卒」本文の引用は、全てこれに拠り、引用後に示した頁番号は同書のものである。
- ⑨ 戸松泉は「隣室」から「一兵卒」へ——脚気衝心をめぐる物語言説——」（『小説の（かたち）・（物語）の揺らぎ——日本近代小説——構造分析』の試み、二〇〇二年二月、翰林書房）において、このような語り、死そのものを身体的に言説化しようとする大胆な試みと評価し、加藤の無意識が語られることでむしろ語り手の存在が顕在化すると指摘している。また王梅も「病の身体、意識の身体——田山花袋「一兵卒」論——」（『近代文学試論』第五一号、二〇一三年一月）において苦痛の表現に注目し、加藤の意識に浮上する断片的な妄想と深層心理が、意識の流れとして描き出されていると指摘している。
- ⑩ 「一兵卒」は「山の悲劇」と同じ一月発表の作品ではあるが、例えば、XYZ「新年の文壇（二）」、白雲子「一月の小説界」（いずれも『読売新聞』、一九〇八年一月二日）、山口雨声「新年の傑作小説」（『文庫』第三六卷第三号、一九〇八年二月一日）をはじめ、多くの時評等で取り上げられた。
- ⑪ 小林一郎前掲書一五四頁
- ⑫ 引用は『定本花袋全集』第二六卷（一九九五年六月、臨川書店）六一四頁に拠る。

⑬ 引用は『定本花袋全集』第二四卷（一九九五年四月、臨川書店）五九頁に拠る。

⑭ 引用は『定本花袋全集』第二四卷（前掲）一一九頁に拠る。

⑮ 永井聖剛『自然と人生との間——自然主義文学の生態学』（二〇二二年一月、春風社）一〇頁

⑯ この箇所は、アンドレーエフ作、二葉亭四迷訳（新訳）『血笑記』（一九〇八年八月、易風社）の次のような場面によく似ている。

手探りで面を洗つて、布片で拭いたら、面の皮が釣れて傷がヒリ／＼と傷む。鏡で見やうとして、マツチを点けて、そのちら／＼と弱い火影に透して見ると、暗黒に何だか醜い無気味な物が居て、私の顔をぢろりと見たので、狼狽（くらぐらみ）でマツチを棄て、了つた。が、どうやら鼻がめツちやになつて居るらしい。（一三五頁）

花袋の死後に刊行された『花袋全集』第七卷（前掲）の「解説」における「山の悲劇」などを熟読してみると、其描写の手法にロシヤのアントン・エフの「血笑記」と相通するものがある（七四三頁）という中村星湖の指摘は非常に興味深く、今後詳細な調査を行いたい。

⑰ 中村誠は前掲論文で、「O」が所持し、途中まで信頼する陸軍参謀本部陸地測量部作製の南北アルプス「五万分の地図」の刊行が、本作発表の四年前の一九一三年であることを指摘している。

⑱ 小林一郎前掲書および中村誠前掲論文参照。

⑲ 高頭式・高野鷹蔵・中村清太郎・三枝威之介・小島久太「白峰及び赤石山脈縦横記」（『山岳』第五年第一号、一九一〇年三月）

⑳ 引用は『小島烏水全集』第十卷（一九八〇年七月、大修館書店）三二四頁に拠る。このあたりの事情や後述する『文章世界』誌上での酷評とその後日談については、小島烏水「紀行文家の群れ——田山花袋氏——」（『アルビニストの手記』、一九三六年八月、書物展望社）で回想

されている。なお、中村誠も前掲論文でこのやりとりと言及している。

㉑ 引用は『小島烏水全集』第六卷（一九七九年九月、大修館書店）三五頁〜三九六頁に拠る。

㉒ 吉江孤雁「近代人の自然の見方」（『新潮』第一六卷第三号、一九二二年三月）

㉓ 永井聖剛前掲書一八頁〜一九頁。なお、永井が紹介・援用した坂井の研究は坂井健『没理論争とその影響』（二〇二六年二月、思文閣出版）、小堀の研究は小堀洋平「花袋・メレシコフスキイ、藤村——『人および芸術家としてのトルストイ』の貸借をめぐる基礎資料——」（『田山花袋記念文学館研究紀要』第三二号、二〇一八年三月）と「田山花袋はトルストイ原作『コサアク兵』をいかに訳したか——ロマン主義化と「自然」の問題——」（『田山花袋記念文学館研究紀要』第三二号、二〇一九年三月）。

㉔ 引用は『小島烏水全集』第六卷（一九七九年九月、大修館書店）五七頁に拠る。

㉕ エマーソン著、大谷正信訳『恵馬遜傑作集』（『自然論』原著一八三六年刊、一九〇六年一月、大日本図書）四頁〜五頁

㉖ 永井聖剛前掲書をはじめ、多くの先行研究による指摘がある。

㉗ この問題については、別稿を用意したい。

〔付記〕 引用にあたっては原則として旧漢字を新漢字に改め、省略した箇所は「略」と示した。また、ルビ等は適宜省略した。